

〈原著論文〉

# COVID-19感染拡大によって代替実習を経験した学生の思い - 看護基礎教育における学内実習の可能性を検討する -

Thoughts of Students Experiencing Alternative Practice through  
the COVID-19 Infection Outbreak  
- Examining the Possibility of On-Campus Practice in Basic Nursing Education -

山本 純子<sup>1</sup>, 谷地 季子<sup>2</sup>, 登喜 和江<sup>3</sup>, 山本 直美<sup>4</sup>

## 要旨

本研究の目的は、COVID-19感染拡大によって臨地実習ができず代替実習を経験した看護学生の思いを明らかにすることである。看護系大学に在籍し2020年度に領域別実習を履修した看護学生を対象に、無記名自記式質問紙調査を実施した。実習への満足度と知識・技術・態度の達成度は5段階評価で回答を求め、記述統計を行った。卒業にあたっての思いへの問いは自由記述で回答を求め、質的帰納的に分析を行った。結果、実習の達成度の平均値は、知識4.0 (±0.78)、技術2.5 (±0.98)、態度3.7 (±0.96) で、実習の満足度の平均値は3.1 (±0.79) であった。代替実習を経験した看護学生は、実習形態の変更を余儀なくされたことで、学びの機会を【失った感】があり、経験不足による【不安】や【不確かさ】を感じる一方、学内実習での【手ごたえ】を得て、卒業後の活躍への【期待感】を抱いていた。学生は、実際に患者へ看護を提供できなかったことにより技術面への不安を感じながらも、臨地実習で困難感を抱きやすい看護過程の展開の課題に対し、グループ学習により時間をかけて取り組めたことで知識面の理解を助け、達成度を高めることにつながったと考えられる。学内実習は臨地実習の代替ではなく、学習教授方法の一つの選択肢とすることが可能ではないかと考える。そのためには、ICT環境やシミュレーション教育の充実といった教育環境の整備や教育の質を高めていくことが求められる。

キーワード：新型コロナウイルス感染症, 看護学生, 代替実習, 思い, 看護基礎教育  
COVID-19, Nursing Student, Alternative Practice, Thoughts, Basic Nursing Education

## I. 諸言

コロナ禍における看護基礎教育で、大きな問題となったのが医療提供体制のひっ迫による影響であった。医療現場の混乱はコロナ感染患者の受け入れにとどまらず、通常の医療活動や入院患者の日常にまでに及んだ。それに加えて、一般病棟の閉鎖やコロナ患者を受け入れる病棟の開設などによって、急激なマンパワーの不足に陥った。そのため、看護基礎教育の要となる臨地実習が次々と受け入れ中止となった。

厚生労働省と文部科学省は、このような事態に代替実習での単位習得を認める方針を示した(厚

生労働省/文部科学省, 2020)。これは、学生たちが患者あるいは対象者と関わることなしに臨地実習を履修したと解釈できるものである。このような代替実習での学習効果について、本来の臨地実習と同等の効果を期待するのは難しいと思われた。しかし、看護基礎教育機関では、限られた学習環境の中で実施可能な教育方法が模索され、可能な限り臨地実習の体験に近づける努力がなされた。学内で代替実習ができる場合は、学生同士や教員が模擬患者となったシミュレーション学習(佐野ら, 2022)、モデル・シミュレーターを用いたシミュレーション学習(記村ら, 2020)が行われた。遠隔での代替実習では、画面越しの模擬患者(教員)

- |                  |                    |               |
|------------------|--------------------|---------------|
| 1 Junko YAMAMOTO | 千里金蘭大学 看護学部        | 受理日：2022年9月2日 |
| 2 Toshiko TANIJI | 千里金蘭大学 看護学部        | 査読付           |
| 3 Kazue TOKI     | 千里金蘭大学 看護学部・看護学研究科 |               |
| 4 Naomi YAMAMOTO | 佛教大学 保健医療技術学部      |               |

とのシミュレーション学習（宇野ら，2022）、臨床看護師や入院患者（対象者）をオンラインでつなぐ取り組み（前原ら，2022；大鳥ら，2021）等が実施された。文部科学省（2020）の調査報告では、基礎看護学実習から統合実習までのすべての臨地実習において、期間中の全部あるいは一部で代替実習を実施しており、90%が学内実習、80%が双方向オンライン実習と複数の手段を講じていた。

大阪府に所在するA看護系大学においても、実施可能な授業方法を取り入れ、臨地実習に近づける教育を展開する努力を重ねてきた。これまで、コロナ禍での代替実習を経験した学生は、さまざまな不安や学習への不全感などネガティブな思いを抱いているとの報告がある（高岡ら，2021；服部ら，2021）。しかし、学生は臨地実習ができないという現実を受け止め、その時々でできる学習に精一杯取り組んでいる姿を見せていた。その姿は決してネガティブという側面だけではなく、前向きさの現れととらえることもできるのではないかと感じた。一方で、教育環境を提供する側のさまざまな努力や創意工夫を、学生がどのように感じ、学習に反映されたのかを検証するには至っていない。

そこで、本研究では、COVID-19感染拡大によって臨地実習ができず代替実習を経験した看護学生の思いを明らかにすることを目的とする。そして、看護基礎教育における学内実習の可能性を検討する。

## II. 研究方法

### 1. 調査対象

A看護系大学に在籍し2020年度に領域別実習を履修した看護学生104名

### 2. 調査時期

2021年6月

### 3. 調査方法と調査内容

下記の調査内容について、無記名自記式質問紙を用いて実施した。必修科目の講義後に単位認定者でない研究者が研究の趣旨、目的、方法、倫理的配慮を書面および口頭で説明し、調査協力を依頼した。質問紙は留め置き法にて、依頼から2週間の研究参加の検討期間を設けた後に自由に投函できる回収箱にて回収した。

### 1) 実習日数と学習内容

各実習科目の実習日数および実習内容について尋ねた。実習内容は、臨地「対面での看護、施設見学、看護師のシャドー、リモートで対象者と会話、電子カルテの閲覧、その他」と学内「シミュレーション、看護過程の展開、看護技術の確認、その他」で該当項目全てに印を入れるよう依頼した。

### 2) 知識・技術・態度の達成度と実習への満足度

知識・技術・態度の達成度は、「1：全く達成できなかった、2：やや達成できなかった、3：どちらともいえない、4：やや達成できた、5：大いに達成できた」の5段階評価で回答を求めた。実習の満足度は、「1：大いに不満、2：やや不満、3：どちらでもない、4：やや満足、5：大いに満足」の5段階評価で回答を求めた。

### 3) 卒業にあたっての思い

卒業にあたっての思いは、自由記述で回答を求めた。

## 4. 分析方法

知識・技術・態度の達成度と実習への満足度は記述統計を行った。統計処理は、IBM SPSS Ver.26を使用した。学生の思いは、質的帰納的に分析を行った。記載された内容から、代替実習を経験した思いや卒業への思いを示す記述を抽出し、意味を損なわないようにコード化した。次に、意味の類似性・相違性を確認しながらコードを分類し、サブカテゴリ、カテゴリへ集約した。分析過程において、看護教育および質的研究に精通した研究者4名による検討を繰り返し、信頼性を確保した。

## 5. 倫理的配慮

対象者には、全員が履修する授業終了後に、単位認定者でない研究者が書面および口頭で説明した。対象者が協力を拒否する権利を保障するために、研究協力は自由意思であること、協力の有無は成績評価やその後の教育になんら影響がないこと、個人が特定できないように質問紙は無記名とするが提出後の撤回は困難であるため十分に検討すること、データは厳重に管理し研究目的以外で使用しないこと、研究成果は提携病院等への情報提供に用いるとともに看護系の学会誌等に論文として発表するが、その際も個人が特定されないよう配慮することについて説明した。

本研究は、研究者が所属する大学の疫学研究倫理審査委員会の承認を受けて実施した（承認番号

K21-002)。

### Ⅲ. 結果

104名へ質問紙を配布し、23名より回収した（回収率22.1%）。全ての質問紙を分析対象とした。

#### 1. A看護系大学における2020年度の領域別実習の実際

2020年度に行われたA看護系大学の領域別実習の実習日数、学習内容を表1に示す。実習内容は、7つの領域の実習全てで変更され、臨地での対面の看護が可能だった実習は精神看護学実習と小児看護学実習のみだった。また、2領域は実習病院内施設で電子カルテの閲覧、4領域は施設見学を行う実習を実施していた。学内実習では、全ての領域で看護過程の展開を行い、多くの領域でシミュレーションでの実践を行っていた。また、ナーシング・スキル<sup>®</sup>での看護技術の確認、実習施設との遠隔実習なども、一部の領域で行っていた。

#### 2. 知識・技術・態度の達成度と実習への満足度

実習における達成度の平均値（標準偏差）は、『知識』が4.0（±0.78）で、「やや達成できた」が15名（65.2%）と最も多く、「大いに達成できた」が4名（17.4%）、「やや達成できなかった」が2名（8.7%）、「全く達成できなかった」と「どちらともいえない」が0名（0%）の順だった。『技術』は2.5（±0.98）で、「やや達成できなかった」が8名（34.8%）と

最も多く、「どちらともいえない」が6名（26.1%）、「やや達成できた」が4名（17.4%）、「全く達成できなかった」が3名（13.0%）、「大いに達成できた」が0名（0%）の順だった。『態度』は3.7（±0.96）で、「やや達成できた」が10名（43.5%）と最も多く、「どちらともいえない」と「大いに達成できた」が4名（17.4%）、「やや達成できなかった」が3名（13.0%）、「全く達成できなかった」が0名（0%）の順だった（図1）。

実習の『満足度』の平均値（標準偏差）は3.1（±0.79）で、「どちらでもない」が9名（39.1%）と最も多く、「やや満足」が7名（30.4%）、「やや不満」

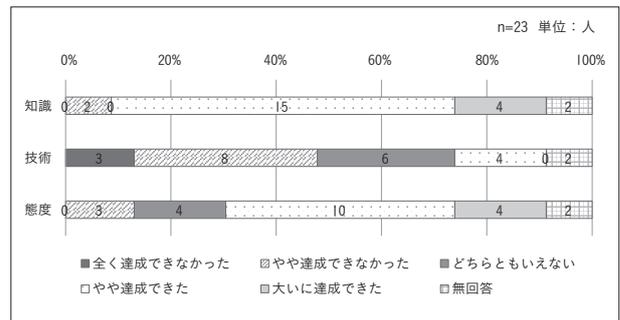


図1. 知識・技術・態度の達成度

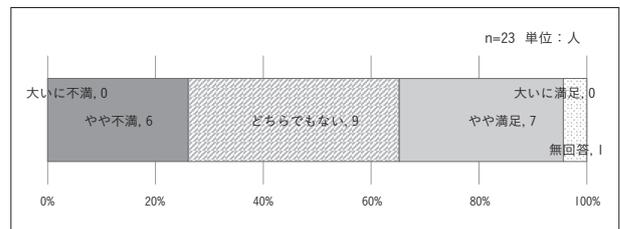


図2. 実習の満足度

表1 領域別実習の実習日数と学習内容

実習科目名	臨地での実習						学内実習				n=23	
	平均日数	対面での看護	施設見学	看護師のシャドー	リモートで対象者と会話	電子カルテの閲覧	その他	平均日数	シミュレーション	看護過程の展開		看護技術の確認
成人看護学実習Ⅰ	3.6	0	▲	△	0	◎		6.9	◎	◎	△	
成人看護学実習Ⅱ	3.7	0	▲	△	×	◎	見学実習	7.8	△	◎	△	
老年看護学実習	0	0	0	0	×	×		11.0	×	◎	×	リモートで臨床指導者からの指導
小児看護学実習	1.8	×	▲	0	×	0	保育園・支援学校実習	8.2	◎	◎	▲	リモートで臨床指導者からの指導
母性看護学実習	0	0	0	0	0	×		10.0	◎	◎	△	模型使用、DVD学習
精神看護学実習	3.4	◎	▲	×	0	▲	紙カルテの閲覧	6.3	▲	◎	▲	
在宅看護学実習	0	0	0	0	0	×		11.0	◎	◎	▲	

※ ◎75%以上の学生が実施、△50～74%の学生が実施、▲25～49%の学生が実施、×24%以下の学生が実施、0全員が実施なし  
※ 実習の平均日数は、本調査で学生が回答した数値から算出し、学生が認識した実習日数として示す

が6名(26.1%)で、「大いに不満」と「大いに満足」は0名(0%)の順だった(図2)。

### 3. 代替実習を経験した学生の思い

卒業にあたっての思いの自由記述内容については、代替実習の経験を意味づけ、卒業に向けての思いの記述がみられたため、ここでは『代替実習を経験した学生の思い』として分析した。その結果、30コードから15サブカテゴリ、5カテゴリが抽出された(表2)。看護学生は、実習形態の変更を余儀なくされたことで、学びの機会を【失った感】があり、経験不足による【不安】や【不確かさ】を感じる一方、学内実習での【手ごたえ】を得て、卒業後の活躍への【期待感】を抱いていた。

以下、カテゴリを【】、サブカテゴリを<>、参加者の記述内容を斜体で示す。

【失った感】は、<学生らしい生活が送れなかった不満感>、<実習の機会がなくなった残念な気持ち>の2サブカテゴリで構成された。学生は、自分がイメージし望んだ学生生活を送ることができなかったことや、実習で様々な対象者と関わる経験が叶わなかったことに、学びの機会を失った感覚を抱いていた。

「貴重な学生生活の2年間がリモートになる等、学生らしい生活が送れていないため、学習面も私生活の面も不満が残りそう (No21)」

「将来は成人の一般病棟に就職したいと思っているが、領域別実習で母性や在宅の経験ができるのを楽しみにしていたため、その機会がなくなって残念な気持ちがある (No10)」

【不安】は、<実習に行けないまま卒業・就職する不安>、<実践経験の少なさへの不安>、<人間関係形成への不安>の3サブカテゴリで構成された。多くの学生が、臨地実習で対象者へ実践する経験が得られなかったことに不安を感じるとともに、先輩看護師や他職種と関わる機会がなくなったことで、就職後の人間関係への不安を感じていた。

「現場の経験がないまま、卒業することにとっても不安を感じています。……このまま卒業しても、いいのだろうか考えることはよくあります (No23)」

「実習で患者さんと対面で看護ができないので、実際働くときに不安……技術面がとても不安 (No19)」

「先輩看護師や他の職種の方と上手く人間関係を形成できるかが不安 (No7)」

【不確かさ】は、<自分の力量の分からなさ>、<計画の評価ができなかったもやもや感>、<卒業後のイメージができない>の3サブカテゴリで構成された。事例患者を用いたシミュレーションの実践を行う学内実習もあったが、学生は行った看護に対するリアルな患者の反応でなかったことから看護計画や実践への評価が難しく、自分の力量が分からないといった不確かさを感じていた。

「アセスメントの修正等、提出した課題に対して、十分な振り返りがなかったため自分自身がどこまでのレベルでできていたのかわからないまま実習が終了してしまった (No21)」

「考えて計画を立案しても実際に実施し評価を行えなかったため、このケアは、対象者の個別性に合わせられているのかについては明らかにならなかったため、今でもモヤモヤしている (No6)」

「知識は身についたとはいえ、それを現場で活かすことができるという卒業後の自分のイメージがまだ想像できない (No17)」

【手ごたえ】は、<より深く考えることができた>、<情報と向き合えた>、<チームの一員としての必要な経験ができた>、<自分の課題を導き出せた>の4サブカテゴリから構成された。学生は、学内実習でじっくりと時間をかけて課題に取り組むことができたことやチームでの協働学習ができたことを前向きにとらえ、学びの手ごたえを得ていた。

「学内での実習は臨床での実習と比べ、1つ1つの物事をより深く時間をかけて考えることができました (No11)」

「臨地で実習ができなかった分、情報と向き合い、コツコツと看護過程を展開することができた (No21)」

「(チームで学びを共有することで) 価値観の違いや多角的な視点も学ぶことができ、チームの一員として働くために必要な経験はできたのではないかと思う (No10)」

「患者さんとのコミュニケーションについては、臨地にあまり行けなかったが、ゼロではなく関わることでできた実習もあったので、そこで自身の課題を導き出せたと思い、卒業にあたり不安には感じていない (No17)」

COVID-19感染拡大によって代替実習を経験した学生の思い

表2 代替実習を経験した学生の思い

カテゴリ	サブカテゴリ	代表的な参加者の記述内容
失った感	学生らしい生活が送れなかった不満足感	貴重な学生生活の2年間がリモートになる等、学生らしい生活が送れていないため、学習面も私生活の面も不満が残りそう
	実習の機会がなくなった残念な気持ち	将来は成人の一般病棟に就職したいと思っているが、領域別実習で母性や在宅の経験ができるのを楽しみにしていたため、その機会がなくなって残念な気持ちがある
不安	実習に行けないまま卒業・就職する不安	現場の経験がないまま、卒業することにとっても不安を感じています。……このまま卒業しても、いいのだろうかと考えることはよくあります
	実践経験の少なさへの不安	実習で患者さんと対面で看護ができないので、実際働くときに不安……技術面がとても不安
	人間関係形成への不安	先輩看護師や他の職種の方と上手く人間関係を形成できるかが不安
不確かさ	自分の力量の分からなさ	アセスメントの修正等、提出した課題に対して、十分な振り返りがなかったため自分自身がどこまでのレベルでできていたのかわからないまま実習が終了してしまった
	計画の評価ができなかったもやもや感	考えて計画を立案しても実際に実施し評価を行えなかったため、このケアは、対象者の個性に合わせられているのかについては明らかにならなかったため、今でもモヤモヤしている
	卒業後のイメージができない	知識は身についたとはいえ、それを現場で活かすことができるという卒業後の自分のイメージがまだ想像できない
手ごたえ	より深く考えることができた	学内での実習は臨床での実習と比べ、1つ1つの物事をより深く時間をかけて考えることができました
	情報と向き合えた	臨地で実習ができなかった分、情報と向き合い、コツコツと看護過程を展開することができた
	チームの一員としての必要な経験ができた	(チームで学びを共有することで) 価値観の違いや多角的な視点も学ぶことができ、チームの一員として働くために必要な経験はできたのではないかと思います
期待感	自分の課題を導き出せた	患者さんとのコミュニケーションについては、臨地にあまり行けなかったが、ゼロではなく関わることでできた実習もあったので、そこで自身の課題を導き出せたと思い、卒業にあたり不安には感じていない
	頑張ったから大丈夫	4年がんばったから大丈夫!
	皆同じ条件だから大丈夫	自分が学んだことが、通用するのかわかりませんが、全国の学生が同じ条件にあるということを考えると少し大丈夫だと思います
	貴重な経験や知識を生かしたい	学内での貴重な経験や知識を生かし、就職後の看護に役立てたいと思います

【期待感】は、＜頑張ったから大丈夫＞、＜皆同じ条件だから大丈夫＞、＜貴重な経験や知識を生かしたい＞の3サブカテゴリから構成された。学生は、学内実習でも精一杯頑張って取り組んだから大丈夫、コロナ禍で実習形態が変更になったのは自分だけではない、と自分を励まし、学内の実習で得られた貴重な経験や知識を就職後に生かしたいと、卒業後の活躍への期待感を抱いていた。

「4年がんばったから大丈夫! (No.5)」

「自分が学んだことが、通用するのはわかりませんが、全国の学生が同じ条件にあるということ考えると少し大丈夫だと思います (No.23)」

「学内での貴重な経験や知識を生かし、就職後の看護に役立てたいと思います (No.13)」

#### IV. 考察

A看護系大学ではCOVID-19の流行によって多くの領域の臨地実習が困難となった。教員は実習形態の変更への対応に追われたが、臨地実習の代替として新たに組まれた学内実習プログラムで学生は、電子カルテ等を用いた事例による看護過程の展開や展開事例を用いたシミュレーションの実践などに取り組んでいた。

以下に、そのような学内実習を経験した学生の知識・技術・態度の達成度と実習への満足度、思いについて考察し、その後、看護基礎教育における学内実習の可能性を検討する。

##### 1. 知識・技術・態度の達成度と実習への満足度

学生がとらえた実習への満足度は、「大いに満足」「大いに不満」と答えた学生はおらず、「どちらともいえない」が最多で、「やや満足」と「やや不満」で半数を上回った。これは、コロナ禍で臨地での実習ができなかったものの代替実習を経験できたことで、大いに満足できたとは言えないが、不満ともいえない学生の思いを示していると考えられる。

達成度の平均値は、高い方から『知識』、『態度』、『技術』の順だった。『知識』は、「大いに達成できた」、「やや達成できた」と回答した学生が8割以上を占め、多くの学生が達成感を感じていた。『態度』は、「大いに達成できた」、「やや達成できた」と回答した学生が6割程度と半数を超えていたが、「やや達成できなかった」、「どちらともいえない」と回答した学生も3割程度いた。『技術』は、「全く達成できなかった」「やや達成できなかった」と回答

した学生が5割近くおり、「やや達成できた」、「大いに達成できた」と回答した学生を大きく上回った。シミュレーションのプログラムに取り組むものの実際の対象者と関わらなかったこと、時間や設備等の制約により体験の機会を得にくかったことなどが技術面の低い評価へとつながったと考えられる。一方、知識への評価は高かった。学生は紙上事例による看護過程の展開を、グループ学習を通して時間をかけて丁寧に行う経験をしていた。臨地実習において看護過程の展開は、困難感の1つとしてあげられる(千田ら, 2012)が、困難感を抱きやすい課題に対して時間をかけて取り組めたことは、学生の知識面の理解を助け、達成度を高めることにつながったと考えられる。

##### 2. 代替実習を経験した学生の思い

代替実習を経験した学生の思いでは、新型コロナウイルス感染症の流行に伴い臨地実習の形態、内容が変更になったことで、学びの機会を【失った感】や、実際に患者へ看護を提供ができなかったことによる【不安】や【不確かさ】を感じていた。高岡ら(2021)は、新型コロナウイルス感染拡大下で看護学実習に臨む学生は、学内実習・オンライン実習となった場合の経験不足や就職への心配を感じていると述べている。本研究で対象となった学生も、同様の思いを抱いていることが明らかとなった。臨地実習は学生自身がリアルな看護を経験することで自身の力量や適性を実感する場だけに留まらず、先輩看護師との対応を学ぶ場であり、多くの刺激を受けながら看護職者に育っていくプロセスを体験する場でもある。そういった一つ一つの体験を積んでいない学生は、4月から就職する臨床現場で自身が働いている姿を想像できず、そのことが様々な不安を感じさせていると考えられる。

一方、本研究では学生はネガティブな思いだけでなく、学内実習での学びの【手ごたえ】というポジティブな思いを得ていたことを明らかにすることができた。学内で時間をかけて丁寧にグループ学習に取り組んだことで得た手ごたえは、彼らの強みであると捉えることができる。田端ら(2020)は、学内実習となった老年看護学実習の取り組みと学生のアンケートから、学生には病院で実習できなかったことに伴う不安や、高齢者との関わりを通して得る学びの不足があったが、学内実習の特徴として、グループでの検討や自らが高齢者役

として援助を受ける体験を通して、老年看護についての考えを広げ、学びを深めることができたことを明らかにした。荻原(2022)は、成人看護学実習を遠隔実習にてリアルタイムで看護展開ができるように工夫し、学生はオンライン環境にあっても臨地での実習と同様に日々模擬患者と関わることによって、リアリティを感じながら実習に臨んでいたことを明らかにしている。さらに、高畑ら(2021)は、成人看護学実習の学内実習で学生同士が関わる中で代理的体験をし、自己効力感が高まったことを明らかにしている。本研究の対象となった学生も先行研究の結果と同様に、学内実習でグループ活動を行う中で様々な気づきを得て学びを深化させていた。学生自身が学びの手ごたえを実感できたことによって知識面の達成度を高く評価し、それらの経験で獲得した自らの強みを糧に卒業後へ意識を向け、活躍への【期待感】を抱くことにつながったと推察できる。

### 3. 看護基礎教育における学内実習の可能性

看護師国家試験を受験するにあたり、専門分野Ⅰ、専門分野Ⅱ、統合分野の23単位の臨地実習の履修が必要である。臨地実習は、看護職者が行う実践の中に学生が身を置き、看護職者の立場でケアを行い、看護の方法について、「知る」「わかる」段階から「使う」「実践できる」段階に到達させるため、不可欠な過程であるとされている(文部科学省, 2002)。臨地実習は看護師養成において根幹となる学習と位置付けられ、学生は対象者等との関わりから多くの学びを得ている。一方、学生は、『看護過程の展開』、『カンファレンスの運営と討議』、『患者との関わり』、『指導者との関わり』、『看護援助の実施』などに困難感を感じている(中本ら, 2015)。また、沖野(2001)は、臨地実習における看護学生のストレスの要因として学生自身の知識の不十分さや技術の未熟さ、教育サイドの評価に対する恐れが関連していることを挙げ、さらに、荒井ら(2010)は、はじめて実習する学生にとって、普段の学生生活とは違う環境、出来事がストレスになっていると述べている。つまり、臨地実習では学習段階に応じて到達を期待する実習目標が設定されているものの、学生は臨地という慣れない環境下で、『看護過程の展開』といった知識・技術・態度の側面から多重の課題に直面し、困難感や負担感を抱いている現状がある。そのような中、COVID-19の流行の措置として行われたグルー

プでの看護過程の展開やシミュレーションでの実践といった学内実習が、看護過程の展開に苦手意識を持つ学生の理論知の深化につながる学習方法として有用であるということが本研究で明らかとなった。そのことから、学内実習は臨地実習の代替という位置づけではなく、知識面の効果を期待する学習教授方法の一つの選択肢とすることが可能ではないかと考える。そのためには、ICT環境やシミュレーション教育の充実といった教育環境の整備や教育の質を高めていくことが求められる。

さらに、本研究で明らかにされた代替実習を経験した学生の思いから、臨地実習に向けてこれまでの知識・技術・態度面の強化の仕方を工夫する必要があり、看護基礎教育の中にある現場第一主義的な考えを見直す必要性も示唆された。菱沼(2021)もCOVID-19による教育の危機の体験から看護学教育、特に臨地実習の意味、臨地実習からでなければ学べないものは何かを問い、臨地実習を再考した。そして、COVID-19以後の臨地実習として、「看護実践の体験ができる準備ができた学生、すなわちコミュニケーションをとれる、病気を知っている、病床における生活支援方法を使える、治療方法を知っている、社会資源を知っている、問題解決技法(看護過程)を使える、病むということや病気と共に生活すること、あるいは死を迎えることについて色々な考え方を学んでいるなど、このような学習が済んだ学生が、医療機関で1か月、1か所で、1病棟1~2人が学ぶ臨地実習」を提案している。看護学教育においては、様々な学習形態による学習効果を引き続き検証しつつ、学内で学べることと臨地でしか学べないことを吟味し、看護学実習の在り方を検討していく時期に来ているのではないかと考える。

## V. 結論

本研究結果から、以下のことが明らかとなった。

1. 看護学生は、『知識』への達成度を高く評価し、「大いに達成できた」、「やや達成できた」と回答した学生が8割以上を占めた。一方、『技術』への評価は低く、「全く達成できなかった」、「やや達成できなかった」と回答した学生が5割近くいた。実習の満足度は「大いに不満」と「大いに満足」はならず、「どちらともいえない」が最多であったことから、臨地実習ができなかったものの代替実習を経験できたことで、大満足と

は言えないが、不満ともいえない学生の思いを示していると考えられた。

- 看護学生は、実習形態の変更を余儀なくされたことで、学びの機会を【失った感】があり、経験不足による【不安】や【不確かさ】を感じる一方、学内実習での【手ごたえ】を得て、卒業後の活躍への【期待感】を抱いていた。実際に患者へ看護を提供できなかったことにより技術面への不安を感じながらも、臨地実習で困難感を抱きやすい看護過程の展開の課題に対し、グループ学習により時間をかけて取り組めたことで学生自身が学びの手ごたえを実感できたことから、卒業後の活躍への期待感を抱くことにつながったと推察できた。
- 学内実習は臨地実習の代替ではなく、学習教授方法の一つの選択肢とすることが可能ではないかと考える。そのためには、ICT環境やシミュレーション教育の充実といった教育環境の整備や教育の質を高めていくことが求められる。

## VI. 本研究の限界と今後の課題

本研究において、コロナ禍で代替実習を行った学生の思いを明らかにすることができた。しかし、1施設での調査で、対象者数も少なかったことから一般化は困難である。COVID-19の流行は今なお続き、制約の中実習を行う学生が存在することから、引き続き学生の思いに目を向け、柔軟な支援を検討していく必要がある。

## 謝辞

本研究にご協力いただきました学生の皆さまに心より感謝申し上げます。なお、本研究は千里金蘭大学奨励研究の助成を受けて実施した。

## 文献

- 荒川千秋, 佐藤亜月子, 佐久間夕美子, 佐藤千史. (2010). 看護大学生における実習のストレスに関する研究. 目白大学健康科学研究, 3, 61-66.
- 千田寛子, 堀越政孝, 武居明美. (2012). 成人看護学実習における看護学生の抱える困難感の分析. 群馬保健学紀要, 32, 15-22.
- 萩原智子. (2022). 新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) 禍における成人看護学実習 (慢性期)

の展開 - オンライン実習の構築と実践報告 -. 産業医科大学雑誌, 44 (1), 91-100.

- 服部智美, 百々晃代, 西村麻紀, 東谷みゆき. (2021). 新型コロナウイルス感染症拡大下で臨地実習を継続している看護学生の思い. 中国四国地区国立病院附属看護学校紀要, 16, 62-73.
- 菱沼典子. (2021). COVID-19は看護学教育を変える - 臨地実習再考 -. 聖路加看護学会誌, 24, 1-2, 37-39.
- 記村聡子, 梅垣弘子, 廣瀬忍. (2020). 新型コロナウイルス感染症流行下における老年看護学実習の検討: 「治療を必要とする高齢者への看護」を学ぶ学内代替実習プログラム. 四條畷学園大学看護ジャーナル, 4, 31-38.
- 厚生労働省/文部科学省. (2020.2.28). 新型コロナウイルス感染症の発生に伴う医療関係職種等の各学校、養成所及び養成施設等の対応について. <https://www.mhlw.go.jp/content/000642612.pdf>.
- 前原なおみ, 堂本司, 千田昌子, 井上深幸. (2021). ICTを活用した遠隔実習の取り組み - コロナ禍での老年看護学実習の展開 -. 京都看護, 5, 55-62.
- 文部科学省. (2002). 大学における看護実践能力の育成の充実に向けて 看護学教育の在り方に関する検討会報. [https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/koutou/018/gaiyou/020401c.htm#3\\_1](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/018/gaiyou/020401c.htm#3_1)
- 文部科学省. (2020). 新型コロナウイルス感染症に関連する保健師助産師看護師養成学校における臨地実習等の実施状況調査 (10月1日時点) <文部科学省実施>. [https://www.mext.go.jp/content/20200302-mxt\\_igaku-000013087\\_5.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20200302-mxt_igaku-000013087_5.pdf)
- 中本明世, 伊藤朗子, 山本純子, 松田藤子, 門千歳, 横溝志乃. (2015). 臨地実習における学生の困難感の特徴と実習状況による困難感の比較: 基礎看護学実習と成人看護学実習の比較を通して. 千里金蘭大学紀要, 12, 123-134.
- 沖野良枝. (2001). 周手術期看護学実習における学生ストレス評価の分析 (第2報) - 周手術期経過に対応したストレス、不安評価の経時的変化 -. 日本精神保健社会学会年報, 7, 36-44.
- 大鳥和子, 齋藤みどり. (2021). コロナ禍における成人看護学実習 I (慢性期看護実習) 第2報 - 学内実習を主体とした代替実習の効果 -. 了徳寺大学研究紀要, 16, 205-218.
- 佐野真樹子, 森安朋子, 利木佐起子. (2022).

COVID-19禍における急性期代替実習の学習効果と学生の思い. 佛教大学保健医療技術学部論集, 16, 41-52.

田端真, 清水律子, 竹村和誠, 小松美砂. (2020). 新型コロナウイルス感染症により老年看護学実習を学内実習とした取り組みと学生アンケートからの考察. 三重県立看護大学紀要, 特別号, 72-80.

高畑正子, 日浅友裕, 奥村玲子. (2021). コロナ禍により思考過程に重点を置いた学内実習を履修した看護学生の自己効力感. 日本国際情報学会誌『国際情報研究』, 18 (1), 30-38.

高岡寿江, 石堂たまき, 藪下八重. (2021). 新型コロナウイルス感染拡大下で看護学実習に臨む学生の思い. 佛教大学保健医療技術学部論集, 15, 55-68.

宇野智子, 中村円, 飯澤良祐, 首藤英里香, 堀口雅美, 大日向輝美. (2022). COVID-19感染拡大により学内実習に変更した基礎看護実習2に関する教育実践報告. 札幌保健科学雑誌, 11, 87-91.

